

「つがいでしょうか」

「そうだろうな。鷲のような類は、一生同じ相手と生きると聞く」  
中佐も空を見上げている。

鳥にも契りや情があるのだろうかと思ひながら、緩めていた歩調を戻して貯水タンクの脇を曲がる。同時に叫び声と数人の歓声が聞こえてきて六郎は音の方に目をやった。椰子の林の向こうからのようだ。道なりに歩くと左手に人だかりが見えた。

「やれ！ 琴平！ ぶちのめせー」

「四対一だぞ、情けない！ ほらいけいけい！ 足を捕まえろ！」

どうやら喧嘩らしい。もうもうと土煙が立つ中、四、五人で殴り合っている。まわりの人垣は野次馬だ。

「また琴平か」

中佐は面倒くさそうに舌打ちをして、持っていた水筒を六郎に押しつけた。

「おい、やめんか！」

声を張り上げながら土煙の方に歩いていく。取り残された六郎は、戸惑いながら中佐のあとを追った。

「行け！ 琴平！ あと二人！」

「やめんか！ 喧嘩は禁止だ！ おい！」

中佐のあとについて人だかりを窺い見ると、飛行服の航空隊員たちが喧嘩をしていた。四対一の喧嘩らしい。卑怯だが互角にやり合うのだから強いのだろう。

服の背中を二人に掴まれた小柄な男が、目の前の背の高い男を殴っている。しかも後ろの二人にケリを入れながらだ。なかなか強い。でもさすがに四人は無理だ。

小柄な男が後ろから組みつかれ、地面に引き倒された。今だとばかりに三人から押し込まれている。

「やめろ！ 御法度だぞ！」

中佐は怒鳴りながら、ゆるい坂を下りていった。

野次馬たちが中佐に気づいて人垣を分ける。中佐はそこに割って入った。それでも我を失った喧嘩は終わりそうにない。小柄な男が飛ぶような勢いで一人を蹴り倒した。体勢を崩したところに、背の高い男が小柄な男の肩を掴んで押さえ込もうとしている。

「やめ！ やめんかッ！ 斉藤！ 琴平！」

掴み合った姿勢からまた殴り合おうとしている殺気立った三人の塊に、中佐は腰から鞘ごと外した短剣を挿した。一人は気絶して隣に倒れている。

中佐から止めると顎で促され、六郎は書類と水筒を足元に置いて、小さい方に背後から組みついた。男は反射的に振り払おうとする。加減なしの力で捕まえていないと弾き飛ばされてしまいそうだ。

「離、セッ……！」

小柄な男は凶暴に唸った。ものすごい力で暴れるが、六郎の方が体格が上なので羽交い締めは外れない。野次馬たちが、いかにも今止めるつもりだったというようにバラバラと介入してくる。すぐに喧嘩の塊はふたつに分けられた。彼らは引き剥がされながらなお、歯を剥き、吼えた。

「覚えてろ、琴平！ お前の燃料タンクに海水混ぜてやる！」

「やるならやれよ、この馬鹿が！ 寝言は寝て言え、このサル！」

小柄な身体からだから鳴り響く悪態を聞きながら、六郎はするすると男を後ろに引つ張った。二人の間に、カインのような人が入る。コイツらを分けてしまえば喧嘩は終わりだ。

中佐は琴平を睨んだ。

「どういふことだ、琴平。何度目だ貴様！」

琴平と呼ばれた若い男は六郎に掴まれたまま、中佐を猫のように目じりがとんがった大きな目で睨みかえした。

「アイツらが、自分のヘルメットにらくがきをしました！ 悪いのはアイツらです！」

「それは堪えろと言ったはずだ！」

「侮辱を黙って受け入れると言われますか！」

「そうではない、寛い心で赦せと言ったはずだ、わからんのか！」

「わかりません！」

怒鳴り返して、琴平は地面に赤い唾を吐いた。

「琴平を離せ、厚谷！」

命じられて、六郎は羽交い締めにしていた琴平から力を緩めた。琴平は腕を激しく振り払った。ついでに、ギリッと睨まれる。殺気でらんらんと光る、いかにも敵機がよく見えそうな瞳だ。

「俺は悪くない！」

振り返るなり叫ぶ琴平の肩を、中佐は短剣の鞘まがで激しく叩たたきつけた。琴平は地面に横向きに吹き飛んだ。

踏ん張る力もない。喧嘩で力を使い果たしたようだ。

「わかれ、琴平。いいな！ お前には厚谷の案内を申しつける」

「わかりません！」

「琴平！」

叫んだのは六郎だった。中佐が琴平に甘いのは十分わかった。喧嘩を見逃してもらい、同じ注意を重ねて受ける。上官の前で「俺」と口走り、あまつさえ口ごたえまでする。これ以上はダメだ。中佐の立場が悪くなる。そうなったとき中佐の責任は琴平の比ではないのだ。

「……」

我に返ったのか、琴平は少し呆然ぼうぜんとした目をして、あたりに視線を泳がせた。

中佐はそれを見届けて短剣を腰に戻した。道の方から駆けつけてきた下士官に荷物を持たせ、六郎を残してその場を去る。

喧嘩相手と野次馬が引き揚げてゆく。気絶した者は背負われたり引きずられて連れていかれた。

地面に胡座あぐらをかいて座った琴平が、肩で息をしている。やはりかなり小柄だ。どちらかと言えば痩せている。こんな小さな身体で四人と渡り合ったのかと思うと感心するくらいだった。癖毛の黒髪、気の強そうなほつきりとした眉。まるで近所の悪ガキが基地に紛れ込んだようだ。癖毛の黒髪、気の強そうなほつきりとした眉。まるで近所の悪ガキが基地に紛れ込んだようだ。

琴平はじっと俯うつむいたまま動かなかった。立てないのかと思う頃、ぼそりと言った。

「……お前が止めなきや俺は勝ってた」

想像以上の気の強さに、噴き出しそうになるのを六郎は堪たえた。確かにあの一瞬は勝勢だったが四対一

だ。二度も押さえ込まれそうになつていたし、押さえ込まれば一方的に殴られるだけだ。そろそろ体力切れなのもわかった。あそこで止めなかつたら五分後はリンチだろう。いいタイミンダった。

だがそう言うとき琴平は殴りかかってくるだろう、というのが初対面なのに嫌なくらいにわかった。電流のような性格なのだ。癪に障ると火花を上げる。

「そうか、残念だったな」

と言つて、六郎は座り込んだ琴平に手を伸ばした。琴平は口をへの字に曲げ、じろりと六郎を見上げたあと六郎の手を取つた。拳の上がすりむけて埃にまみれた手だが、普段航空手袋をしているせいか手の甲は滑らかで、指がするりと長い。

「俺は厚谷六郎、二十一。五〇一空から昨日転属してきた。階級は二飛曹だ」

「ああ……」

昨日輸送船で到着して、挨拶をしたときはもう日が暮れていたし、日本軍の破竹の勢いを示すような大規模人数の着任だった。互いに頭は下げたはずだがすでに夕刻でもあつた。あの人数を一目で覚えられないはずもない。

六郎の手を借りて立ち上がった琴平は、腹あたりの土を払いながら言つた。

「俺は琴平。琴平恒。同じく二飛曹だ。歳は十九」

「……琴平。……つて」

改めて聞いてふと思ひ当つた。南方部隊は有名な熟練の戦闘機乗りを何人も輩出している。その中に琴平という名があつたはずだ。

「『ラバウルの五連星』」

無敵の戦闘機、零式艦上戦闘機を駆り、連合軍の戦闘機を撃ち墜とす。優秀者には渾名がつけられ、内地にまでも鳴り響く活躍だ。

もっと頑健な大男かと思つていた。もっと軍人らしく年季の入つた威風堂々とした様子かと思つていた。立つてみると六郎よりふたまわり小さい。しかもまだ十九だ。この近所のガキのような、小柄な男がある琴平だというのだろうか。

大きな目の下に赤紫色の痣をつくつた琴平は、血の汚れのついた唇を尖らせ、眉根を寄せながらぼそりと言つた。

「墜ちたんだ、先週」

「何が」

「俺の零戦」

殴り合つたダメージが残っているのか、ぼんやりとした口調で琴平は喋る。

「……そうだったのか。よく生きてたな」

「脇腹撃たれて炎上した。主翼が折れて吹っ飛んだけど、俺はなんとか生きてた。でもアイツが死んだ」  
単座の零戦には同乗者はいない。アイツというのは零戦のことだ。琴平ほどのパイロットになると、空いた航空機に乗るのではなく愛機を持つようになる。それが墜ちたということだろう。

「それは気の毒だった。でも琴平が無事でよかつた」

そう言うとき、琴平は大きな目をパチパチさせて六郎を見つめ、そのあと怪訝に顔を歪めたまま笑つた。